

山野井 昇先生の「役に立つ健康学 水素の可能性」



●プロフィール
 山野井 昇先生
 生体物理医学者。1947年生。東京大学大学院医学系研究科助手を経て現在、一般財団法人未来医学財団理事長。40数年にわたり医療や健康、美容などの最先端研究に従事。著書に「生命の陰陽学」(IDP出版)「水素と電子の生命」(現代書林)「ケイ素の力」(秀和システム)「生き方の処方箋〜日野原重明/山野井昇他対談集」(河出書房新社)など20数冊。新技術未来戦略会議議長、日本マイナスイオン応用学会会長、一般社団法人未病システム学会名誉会員など多くの役職を兼務する。

第12回 水素の先進医療技術と未来展望

水素がヒトに使われた医学事例は古くからある。たとえば減圧症への応用である。

減圧症とは潜水病のことで減圧痛があり、高圧環境下で血液や組織中に溶けていた窒素が、減圧に伴い気泡をつくる病気である。窒素酔いとも言われ、症状はアルコール中毒に似ている。多

幸感から「深海の歓喜」などとも呼ばれ、方向感覚を失い判断力が極度に低下し、時間通りに浮上できなくなる。

この気泡窒素の影響を最小限に抑えるために、深く潜るダイバーは特別に空気と混合された気体に目を配った。それはヘリウムや水素の活用である。因みに近年では第38回日本高気圧環境医学会総会(2003)「ダイバー、特に減圧症に罹患し再圧治療を施行した症例における活性水素水の効果」(吉村)がある。

ところで、これまで水素医学の研究は国の内外を問わず、様々な

大学や研究施設で、動物実験を中心に行われ、数多くの論文が発表された。そこには様々な疾患に対して有用性のある結果が報告されている。そして近年に至り、最終的に水素が現実的なヒト試験を経た臨床現場での実用性が業界の大きな関心事になった。

そのような中、2016年11月厚生労働省より、先進医療Bとして「水素吸入治療法」が承認された。この新しい治療法は、資料によると「心停止後症候群を対象とし、突然に心室細動の

ような不整脈や心停止が発生した際、救急蘇生術によって心臓の鼓動が再開した後、脳をはじめとした臓器機能の血流遮断による酸化ストレスを最小限に食い止める方法である。」さらに肺疾患など、他分野の臨床研究が進めば、実際の医療現場で水素が使われる可能性が大きく開くことになる。

最後に、水素研究の未来を展

望するに、その方法論として、まずはガス応用で先駆する高気圧

酸素療法(HBO)の貴重な研究資料を再検証すべきであると思ふ。そこに「酸素」に對峙する「水素」のアイデンティティが

潜んでいる。宇宙と地球と生命の進化と連鎖の中で、酸素の希薄な最古の海の環境で培われた

生命遺伝子DNAにその秘密が隠されている。しかも水素が遠い光年を経て降り立った地球から、水素の役割を終え宇宙に帰還するには、単なる医用ガス利用の範疇を超え、尊い地球環境の保全と再生の使命がまだ残っている。

(連載は今回で終了です。これまでお読み頂きありがとうございました。山野井 昇)

